

様

住岡狂風

一、皆様大正九年を迎え得ることが出来たのを衷心幸福と存じます。努力すべき新しい時を恵まれたからで御座います。生きていくということは、たとえ、私たちがどんな身の上であろうとも感謝しなければならぬことで御座います。生きていく私たちには、希望があります。努力があります。幸福がございます。生き得た私たちは、此一年を中身のある一年として、送らなければなりません。

一、弟たち妹たち、あなたが毎日一緒にいる人が、三度も五度も「大儀な、辛い、」と言っているのを聞いてみると、あなたも「大儀な、辛い、」と時に言つて見たくなりません。あなたも何気なしに、三度も五度も言つてみると、終にはほんとに心から大儀になり、辛いと思う様になります。そんな嫌な言葉は口にしないことです。そんなことを言う人があれば、よほど体に入れていないとあなたに伝染します。つまりは、他人の悪い感化を恐れなさいと言うのです。

一、あなたのしていることを、まあ一つづつ改善しておゆきなさい。第一言葉づかいの悪いのから、納戸や寝間の隅の汚いのから、爪の長いのから、襦袢の襟の汚いのから、御飯の炊き方から、髪の手入から、炭や薪の使い方から、手水鉢の水から、他人のぬいだ下駄の向かえから、便所の掃除から、漬物の切方から、段々直して行きましょう。

巻頭の叫び！

一、一個の火鉢に火があれば、その近方は温かい。雪の積る深山にも春風駘蕩として吹き来れば、木の芽はふくれ、蕾はほころぶ。

汝は汝のおる汝の世界を温めているだろうか、凍らしているだろうか。汝がもし、正義の味方として、邪悪を倒し、不義をこらし、自己の利益のために悪魔と妥協しないならば、そして又、汝が汝の有する汝の霊の情熱を理智に目覚めたる愛の温風として、病める者、弱き者、悲しめる者に送れば、汝の住む世界は幸福を感謝する人を以って充されよう。

汝がもし、汝の持つ職に忠実でなく、努力せずして、その報酬を得ようと考え、汝の心の奥に点された理想の霊火の光を汝の有する卑しき習慣的慾念の雲に曇らせて、正義を敵として戦うならば、あるいは汝の有する霊の情熱を冷酷なる呪いの叫びと化し、又は汝の無智なるがために、盲目的なる奴隸的なる目覚めざる愛と変えるならば、汝の世界は汝を呪ふ人の声をもって充されよう。

ただ汝は汝の心の真の願いに卑茸に従い、「春風以つて人に接し、秋霜以つて自ら粛め」よ。

一、もし今、心から慨悔しているならば、真に心から後悔しているならば、過去の罪悪は赦されるだろう。何時までも真の我にかえることなく、犯している罪悪を舌と目と手をもつてごまかしているなら、終には汝の幸福は奪われ、人としての汝は亡ぶだろう。

卒然として我にかえり、深く自ら慨悔せよ。

謙遜の態度を取れ。敬虔の心をもて。

私たちが一人の人間の死に対した時、如何なる人間であろうとも襟を正して何かしら真面目な心にならずにはいられません。私たちが不幸な人に同情して涙を流す時、その心は不思議に清められて、我が心の底には、穢れたる我が心を超越した厳かな何物かを見出すことを得るでしょう。

敬虔な心とは正しい飾り気のない謹みぶかい心です。真面目な心です。私たちが日や耳や鼻や手や舌などによりて、物を見、声を聞き、香をかぎ、味を知るにも、私たちの心が敬虔である時だけ、真実を知ることが出来ます。

私たちは自分自身をも、敬虔の心で見なければなりません。一個の人間として、真²に今人間として生きている自分を真面目に考えなければなりません。一体に多くの人は、自分自身を真面目に見る事が足りません。他人が「あなたはよい人」だと言えば、自分はよい人だと思つています。他人が「あなたは悪い人」だと言え、思つて気を悪くします。浮草が波のまにまに漂ふ様に、定まつた考えも自信もなく物足りない一生を送つて行く。そうして、尊い人として生れた一個の人が、唯わけもなく、価値もなく、墓場へ墓場へと送られて行く。ああ、それでは人生はあまりに味がない。あまりに、生きて苦しまなければならぬ意義がない。私たちは、自分自身をもつともつと深く考えて見なければならぬ。私たちがもつ敬虔な心は、きつと、私たちの人生に於ける意義、宇宙に於ける存在の価値を知らせてくれるでしょう。

生老病死の人生に於ける無常の真相を深く感じさせられた釈迦の敬虔なる心は、一切衆生を平等に救済するの悟りを得ました。鉄瓶の湯気一つを敬虔な態度で見つていったワットは、蒸気力を応用して蒸気機関を造り出して不朽にその名を残しています。自己と救いを真面目に考えた我が親鸞には、三里十八町、冬の寒夜に六角堂百夜の祈願も何の辛いことがあつたでしょう。人生に、不朽の功績を残した多くの人たちは、皆、何物をもつても動かすことの出来ない敬虔の心の持ち主であつた。敬虔の態度の欠けた者は、本を読んでも駄目だ。金を持つても駄目だ。仕事をしても駄目だ。位はあつてもつまらない。救われようなどは、初めから思わないことだ。人が人としての価値は、唯その人が、敬虔の態度であつた時のみ出来る。

人は敬虔の心を失った時、墮落の淵に陥る。愛は呪いと嫉妬とにかわり、心は傲慢になつて人を軽蔑し、働くことを嫌がり、仕事にあき、正しき心の光をかくして、快樂にのみ耽る。自分の行いを心に問うことを止めて、他人の批評と、その行いから出る利益とによつて、変えて行く。かくの如くして、多くの人は、唯、安価な一生を送つて行く。

敬虔の心がない者は、真実の自己を知らないが故に、心がたかぶつて来る。心の内に貯えることをしないで、傲慢の皮をかぶつて、真の自分をかくそうとする。心が傲慢であるから、謹みを知らない。その目に見えるものは、強い腕力と、少しの学問と、財産と衣服と小才とである。

謙遜とはたかぶらないことだ、自分を敬虔の心で見た人のもっている美しい徳である。五の力を五と見、三を三と見る心の内である。ほんとの自分を知つて、飾ろうとしないことだ。

他人の価値を知つてやることだ。自分が悪いと知つた時、すぐ正しい議論に賛成する度量のあることだ。まちがっているのを知りながら、どこまでも押し通そうとしないうことだ。

謙遜の心のないものは、常に心は我執で一ばいである。人の意見も耳に入らない。正しい道理もわからない。真面目な人を見れば、けなしたくなる。人は皆馬鹿に見えて、賢い者は自分ばかりである。他人は責めても自分は責めない。まともりそうな問題も壊して行く。徒らな議論に花を咲かせて、得意がる。心や体や財力の弱い者よ、見下げて押し倒す。

謙遜の心のない傲慢な、人を鼻であしらう妻の態度のにくらしさよ。器量を鼻にかける女の卑しげなことよ。貧乏人に威張る金持ちの面のにくさよ。自分より金もあり位もあり学問もある人に向かつて、何時も何時も、反抗的になる弱い人間の哀れさよ。

人の子は常に、内心に敬虔の心をもつて、自ら守り、真面目に自分を見、他人を見、社会を国家を見、宇宙を見なければならぬ。そして又、敬虔の心は人に接して謙遜の態度でなければならぬ。それが人の進んで行く準備だ。救われる形だ。人に愛される道だ。

努力的な生活(四)

意志の強弱

人間の心はもと一つであつて、決して分けることは出来ません。けれども精神の働きは、理性、感情、意志の三つに分けて考えることは皆様の御承知の通りです。

人間は全て今の自分には満足できないで、常に不足を感じるのであります。さて、我々の精神の作用が、足の感じが、そもそも、人間の問題の根本であります。さて、我々の精神の作用が、即ち理性、感情、意志がとくに道徳的方面にむいた時には、その精神の作用を良心と言います。この良心という作用は、人間のみにある尊い作用であります。人間である以上、この作用のない人は一人もありません。

今ある人が金がなくて困つてしているとします。金がない、辛い、苦しい、心が淋しいと思ふのは感情であります。次には、金が今百円ほどあつたらなあ、と目的の観念がおこり、百円あつたら、あれも買える、あれも食われる、どこへも払われる、百円あつたら好いがなあ、と、百円あつた時の快楽を思ひます。次には百円ほしい、さあ、どうして得ようかと欲望が起つてきます。着物を皆、質に入れようか。田を売ろうか。人に借ろうか。今晚、どこかで盗んでやろうか。親にねだろうか。ひと働きして儲けようか。それらは皆欲望であり、欲望はいくらでもあります。そこでいよいよ何れにしようか、どうして百円手に入れようかと、それ等を比較して、どれか一つを選ばなければなりません。

私たちの理性は、その時、その時の自分に一番立派だと思ふものをよつてくれま4す。おまえは、「働いて得なさい。」とか、「必ず返す気で借りなさい。」とか、とにかく一つを選択してくれま4す。いよいよ定まつた一つを動機と申します。我々毎日していることには、みな動機というものがあ4ります。私たちが静かに、本気で率直に、自分の心にきいたら、必ず最も好い動機を与えてくれるものであります。率直に心に従いさえすれば、決して人間は悪いことは出来ない様に出来ています。

道徳的の非難を受ける道徳上の悪は、皆、この動機の定め方が悪いのです。もし、私たちが悪い動機を立てるなら、心はきつと、心を責めるのです。目覚めざる人は、その心の責めを平気でごまかしているか、辛苦して働くよりか、人のものを盗んだ方が楽だと、感情の力をおさえることが出来ないかです。先の例によつて言えば、田を売ること、人の物を盗むことも、借りることも、その人にとつては、どれでも百円取れそうなお4事です。どれでも満足は得られるのです。即ち、皆心理的善であります。しかしながら、私たちの心はその時、どれなりとやれ、とは言わないで、必ず、人にも迷惑をかけず、自分のためにも一番都合のよいもの、即ち倫理的善である動機を定めるのであります。かくして定つた動機は、いよいよ意志の作用によつて行いとなつて来るのであります。

誰も立派な動機は立てま4す。それが出来るかどうかは実に意志の問題であります。人が出世するのもしないのも、成功するのもしないのも、徳のある人になるのも悪人になるのも、皆、意志の強いか弱いかにあるのです。

日誌を書いてやろうと元日に決心して、一月書かないのに止めてしまうのも、百円の金をためてやろうと思つて貯金している者が、人に吝嗇だと笑われて止めてしまうのも、毎日三時間づつ勉強してこの学期には成続をずつとよくしてやろうと思つた学生が、友達に誘われて、遊んでしまふのも、その他、決定した事の出来ないのは、皆意志が弱いからであります。私たちの意志は弱くなりがちであります。何かに出会うと、すぐ弱くなりがちであります。人間には、天性うまれつきもありましょう。

しかし、我々が如何になるかは、要するに意志の問題であります。たとえ、天性賢くなくても、人が一度読むところを三度読み、他人が三度読むところを五度読めばわからないはずはありません。たとえ、生まれつき弱くても人が一日にやることを二日かかり、他人が二日かかるところを四日かかつてやる気になれば、きつと出来あがないことはありません。要するに意志の問題であります。兎と亀との話はごくわかり易くこの問題を私たちに教えているのであります。

私たちは人間として一段一段尊い人間になればなるほど心はいよいよ冴えにさえて来ます。そして自分の不満足であること、悪いことばかり多いということに気がついて来ます。悪い動機で心の満足を得れば、たいへん強く心に責められて来ます。目覚めたる人は、常に、この不満足な自分を進めて行こうと、悪い自分の一時的欲望と戦つて行く苦しみをもつのであります。そして、最も善い動機によつて、自分を満足した時には、悪い動機によつて自分を満足した時よりも大変大きな満足の感じを得ることができます。真に幸福を感じるのであります。

真実の心は「百円の金は働いて取れ」と言うにかかわらず、「人のを盗め」という一時的部分的自我の命令に従つて、百円の金を得るといふ欲望を満足させた時には、すぐその後、たとへがたい、堪へがたい心の責めがわいて来ます。良心は厳肅なる検事の如く、判事の如く、一歩も赦さないで厳しく責めたてます。他人から責められるのなら逃げることもできません。けれど良心の責めはのがれることは出来ません。

休みもなく責めたてます。如何に美味いものを食べても、面白いものを見ても、愉快な歌を聞いても、その苦しみを忘れることは出来ません。ただ酒のみはその苦を軽くしてくれます。もし、真実の心の叫びを聞いて動機を定め「百円働き出そう」と率直に従つて、今から実行に取りかかり、唯々強い意志の作用によつて、努力すれば、苦しいのは苦しいけれど、その苦たるや幸福のともなつた苦であつて、心に悪を責められる苦とは天地の差があります。私たちは、正しい真の心のままの目的を立て、我が意志に鞭をあてて、途中で挫けない様に突進しなければなりません。そして、苦心流汗百円の金が奮闘の結果出来上つた時、私たちは何物にもかえられない大いなる歓喜と幸福を感じます。その時私たちの心は、最も温かい優しい態度で讃めてくれ、慰めてくれるのです。その時こそ、天を仰いで恥じず、地に伏して恥じず、外、人に恥じず、内、自分に恥じないのであります。

私たちは、毎日自分のしていることを、何かで言いわけして、ごまかして、通つていきます。そしてそれでも済んだ様に思つています。しかし心は決して、それでよいと済ませてはくれないのです。人と約氣したことを忘れた時「あまり忙しかったのでつい忘れしました。」と言つても、心は「汝に注意が足りない。」と責めます。言つては

ならないはずの秘密を皆言ってしまったのが、皆友達に知れた時「私は一口も言わないのですのに」とごまかしても心だけは「何故いい加減なことを言つて、のがれようとするのです。友達にあやまりなさい。」と責めたてます。この心の責めを率直に真面目に受ける人は、心の純な人です。救われ易い人です。尊い人です。弟たち妹たち、心から責められる時、率直に受ける人になつて下さい。逃れようとしてはなりません。辛いなら苦しみなさい。苦しんだ次にはきつと心は、その苦を真面目に受ける人なら、その苦から救つてくれます。それは、即ち懺悔であります。涙と共に、心から懺悔の真心が光をはなつて来ます。そして、真の懺悔の後には、必ず、救いが出て来ます。そして、心は再び平和幸福を得ることが出来ます。

こんなことを聞いたら、そんな心はちつともありません、とあなたは言うかも知れない。しかしあなたに努力の苦楽も心の責めもないならば、あなたは神がしからずんば動物です。人間ではありません。あなたのもつてゐる不平というものをよくよく考えて見ることです。他人が悪いから気に入らないと言いますが、そこにはきつと、あなたの悪いと言うことは混つていないでしょうか。よく考えて見ることです。

私たちは人間です。率直に心の裁きに従わなければなりません。あやまつた動機に従つてはなりません。人間のする毎日の仕事、毎日の行いは、よく考えれば必ず二つ以上どちらでも出来るようなことばかりです。やり方が一つしかないという事は絶対にありません。ですからその場合、必ず、正しい善い動機目的を立てなければなりません。そして、意志の力を強くして、きつと正しい方に進む、出来るまでです。むで行かなければなりません。意志の弱い私たちには辛い苦しいことであります。その苦しみを笑つて苦しんで行く、出来るまで苦しんで行く、その生活こそ、努力的生活であります。努力的生活の後には真実の幸福がついています。重ねて言つておきます。

努力的生活とは意志の強い生活です。

かくして、一生の間、自分の不満足に苦しみ苦しみ、自分の心に率直に責められては苦しみ、苦しんでは改め、一生我が霊の光明を見出して行く生活は、ひいて、それが宗教的生活であります。救われたる生活であります。おお一切の人の子よ、宗教的生活の苦しさを知れ。宗教的生活の淋しさを知れ。宗教的生活の尊さを知れ。幸福を知れ。

たより

兄様、秋風哀れに身にしみ、枯れた木の葉にも、もの思いに沈む頃となりました。何故でしょう。本年四月学びの業をおえしより一日として楽しい日はありません。兄様は、あの世の人となりますし、伯父は死んでしまいます。柱とすがれば逝かれ、杖とたのめば、帰らぬ旅に先立たれ、たよりなき哀れな娘となりました。老母のみ……ああ自分は可愛相なものです。何として喜ぶ言葉がありましょう。一家は淋し

いのです。つまらないながら私が何かにつけて、中心とせられます。兄君ましまさば
と思うことは、幾度あるか知れません。呼べど叫べど、帰りたまわぬ兄君、何によつ
てか、自己をなぐさめ、老母を慰めましょう。我は今一家の主権も取らなければなら
なくなりました。

これも何かの約気でしょう。一人泣きます。一人考えます。……そして時々「光
明」のために、なぐさめられます。……略(山脈の麓のコスモス様といたい方の御
手紙の一節です)

狂風日く「これも人生の悲しいありやすい実相です。あなたが泣くより、より以上
強くなって、全てを負って立つて見せる、大なる中心となるという自覚のみ、あなた
を幸福にします。」

総会だより

一月三日十一時開会して、午後四時半閉会いたしました。会順は左の通りです。盛
骨でおわることが出来たのを深くよろこんでいます。

- 一、開会之辞
- 二、唯一つを忍べ
- 三、人間一生働かねばならぬ
- 四、私たちは幸福であります
- 五、祝辞
- 六、お祝いの歌
- 七、孝
- 八、今後の奮発
- 九、何糞
- 一〇、自然の子
- 一一、尺八吹奏
- 一二、昔と今
- 一三、光明団を推す
- 一四、ヴァイオリンと薄馬鹿
- 一五、祈りと呪い
- 一六、唱歌 進みませ
- 一七、偶感
- 一八、ヴァイオリンと薄馬鹿
- 一九、ヴァイオリソ数曲
- 二〇、浪花節 大石妻子の別れ
- 二一、福引き

後記

□ たくさん御金の御手伝い下さいまして有難うございます。規則も団則もないこの団では、いくら出して下さいとは申しません。しかし紙は月々あがつてまいりますし、又お金がたまったら新しい謄写版を買って、よくわかるのを差し上げたいと存じます。心からお出し下さいますならいくらでもいいと思います。どうも有難うございます。

□ 昨年十二月、本団の谷本先生と、重富はやめ嫌が黄泉の人となられたことはかえすがえすも悲しいことで御座います。御二方の御冥福を祈ります。

□ 本団の下土井先生が今度御都合で学校をおやめになることになりました。

□ 居所が変わっても何とも言わず、旅に出ても知らせもしない様な方が時々あるのが悲しうございます。一様にそろわない世の中とは申せ、涙の出るほど感心な弟妹もいて下さる中に、それではあまり情ないと存じます。本村ならいいですけど、旅の方、遠い方、皆様がいないあとに行っても皆様の損にはならないけれど、それでは人の道にかけています。はがき一枚送って下さい。さよなら